

Title	梅溪昇名誉教授に聞く : 大阪大学の思い出 (1)
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2008, 58(3), p. 88-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23345
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【資料】

梅溪昇[†]名誉教授に聞く—大阪大学の思い出—（1）菅 真城[‡]・阿部 武司[‡]

第1回聞き取り 2007年9月11日

於 大阪大学学士会館連絡事務所（東京都千代田区）

浪速高等学校について

阿部 今日梅溪先生にビデオ撮影にご協力いただきます。主に大阪大学の歴史に関してお話しただきたく存じます。

先生は旧制浪速高等学校のご卒業とうかがっておりますが、浪高も大阪大学の大切な前身の1つですので、この辺りからお話をお聞かせいただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

梅溪 どうも。あまりお役に立たないと思いませんけど。

私が浪速高等学校に進学した理由なんです。私は大阪から少し西に行った尼崎の出身で、家が寺なものだから、あまり遠いところへ行けないということもありまして、近いところに入ろうと思ったんです。

大阪では官立の大阪高等学校がありますが、そこは毎年3月初めに試験がある。ところが大阪府立浪速高校というのは七年制高校で尋常科がありますので、そういう関係から2月末、たいてい27日、28日ぐらいに入学試験があるんですね。

いわゆる高等科の入学試験というのは、尋常科に入った連中はそのまま上へ上がってくるのですが、われわれのように外から受ける者は、

毎年の2月末の試験が大変に魅力というか、小手調べなんです。うまく通るか、通らないかわかりませんが、2月末にあるものだから小手調べで受験生が多かったんです。

私は昭和13年（1938）4月の入学ですけれども、そのときには文理科合わせて850人が受けて、入学者が38人なんです。倍率はわりに高いんですね。その他は、みんな尋常科から進学してくるわけです。

私が浪高を受験したのは近いということもありますが、私が通っていた尼崎中学校の5年ほど先輩に、私の家と非常に昵懇の方がいらっしゃって、その人が四修で浪高の文乙に入学、それから東大の独文に進学の先輩から、「4年から受けてみる」と言われて私も受けたんですが、通らなくて、また5年生のときに受け、誰か合格者が1名辞退したらしく、私は補欠入学したんです。

そのときの事情ですが、私は、浪高の発表がある前に広島高校を受験しに行きました。それで太田川の辺りは懐かしいんです。当時大阪の曾根崎の辺りに進学塾がありまして、そこで大阪のナンバースクールである北野中学出身の年長の方と親しくなり、その方が広島高等学校へさきに入学され、私に「君、浪高を受けてもいいけど、3月の初めに広島も受けろ」と言われたんです。広島では、3月の春休みになると寮生が家に帰って空っぽになるから、受験生をそ

[†] 大阪大学名誉教授

[‡] 大阪大学文書館設置準備室講師

[‡] 大阪大学大学院経済学研究科教授

こへ無料で収容して受験させてくれるからと勧められて、広島も受けたんです。

広島を受けて2日目に浪高より補欠入学の通知が来たと家から電報が来たので、3日目を受けずに帰ったんです。おやじの考えで、補欠でも何でもいいから近いところへ行けということが入ったんです。

浪高高等科は文甲、文乙、理甲、理乙というのがあって、各クラス30人ずつなんです。私の文甲の場合は尋常科出身が5、6人、あとは全部、よその中学校から入ってきた者ばかり。文乙はほとんど全員尋常科出身だったと思います。これは理科でも同じ。理科でも理甲と理乙があって、やはり理甲は尋常科が非常に少なく、他の中学校から入ってくるのが多いんですね。

そして、甲というのは第一外国語が英語で、乙は第一外国語がドイツ語なので、ドイツ語をやりたい人は尋常科に行かないとだめだったんです。例えば阪大で言えば、心臓外科で有名な曲直部寿夫氏は医学部で病院長もしましたけれども、彼は僕と同期なんです。彼は理乙で、もちろん尋常科の出身。だから阪大の医学部のスタッフには、わりに浪高の理乙出身の人が多くいますよ。だいたい阪大は理科系の大学でしたから、浪高の理甲、理乙の人たちがわりあい多い。もちろん大阪高校出身も多く、だから、阪大のなかに浪高や大高の同窓会グループみたいなものがありました。

いま浪高庭園や大高の森などもありますように、阪大の理科系に浪高の連中がわりあいに多いのは、地元の関係なんですね。

そういうことで、中学校の先輩で心安い方がおられたり、家庭の事情もあって、近いところを受験して、たまたま誰かが辞退してくれて補欠で入ったんです。こんなことを言う必要はないですが、われわれ高校のときなんかは、席次なんて考えないでしょう。とにかくすれすれで低空飛行して、どうにかうまく卒業すればいい

と、みんな言っていた時代でしたが、卒業のとき、僕は30人のうちで6番でした。

こんなことがなぜわかったかという、これはちょっと話が飛びますが、私は京大を出るときに海軍の文官教授の試験を受けたんです。そうすると、やはり軍隊は席次、序列なんですね。「君、何番だったか」と言われたのですが、そんなことを高校生が知っている筈がない。それでは「担任教授に聞いてくれ」と言われて照会したので、初めて6番だったということがわかった。戦時中はそういう時代でしたね。

私の阪大生活から言えば、これは外であまり言えませんが、阪大に着任してから1年後に京大文学部より招請を受けましたが、家にも近く母校浪高の縁もありましたので京大に行かず、阪大に30年ほど勤めさせていただいたために、適塾ともご縁ができて今日に至っています。

私は浪高の理科のことはわかりませんが、文科の教官はだいたい東大の方が多かったですね。特に私は大学で国史を専攻したわけですが、歴史には鳥巢通明教授がおられました。東大の平泉門下の「青々塾」のことは、立花隆さんが「私の東大論」（『文芸春秋』連載）に書いている。2・26事件のときに説得に行く「青々塾」のなかに、鳥巢通明という名前が出ています。鳥巢先生は平泉門下の非常に優秀な方で、私は3年間国史の講義を聴いて、ノートもあって、いまは浪高史料としてイ号館（大阪大学総合学術博物館）に教科書もみんな寄贈しております。もう亡くなられましたけれども、非常にしんの強い立派な方でした。

その鳥巢先生と私は思い出があるのですが、鳥巢先生に「おまえは歴史をやるんだったら、なんで僕に言わなかったか」と言われました。私は東大なんて初めから行く気がないし、おやじは「近いところで」と言うので、初めから京都しか考えていなかったから相談しなかったと

言った。だけど、鳥巢先生との関係で、私と同期、あるいは一年後輩で、東大の平泉さんのところへ行っただけでも出たんです。

浪高は官立ではなく府立ですから、浪高の安達貞太という校長先生は、北野中学の校長から浪高の校長になられたのですが、この方も東大かどこかのご出身だと思います。わりあい、文科系の先生は英文、独文の語学、そのほかの方も東大出が多かったような気がします。

高校生活で印象に残っている事柄では、浪高の近くには私立の甲南高校、官立の大阪高校があったんですが、どの運動部も、これら3高校間でリーグ戦を春秋にやっていました。私は卓球部にいたのですが、お互いに交際があって、いまでも生き残りが交際をしています。

しかし浪高は官立の大高とは違っていて、寮がないんですね。だから浪高には、寮歌というものがないんです。校歌や運動部の部歌はありますが。ですから、釜洞醇太郎さんにはあまり聞いたことがなかったけれども、大高生から言えば、浪高や私立の甲南高校など七年制の高校は、みんな軟弱な連中だと思われていたと思います。

特に浪高は宝塚が近いでしょう。昔は、いまと違って一般に、高校の生徒は女の子と一緒に歩いたりできませんでしたが、私ら卓球部は宝塚の少女歌劇のなかの遊園地にあった卓球場を使って合宿練習をしたりしていました。宝塚は終点だから、宝塚のことをドイツ語で「エンデ」と言っていたんです。だから映画館へ行くよりも、みんなよくエンデへ少女歌劇を見に行っていました。それも、みんなずぼらなことをやって、お金を払わないで、ただ見たんです。最初の第1幕は切符をチェックするから入場できず、見られないのですが、それから一旦、幕が下がり客が外へ出て、次に入るときにはざっとみんなと一緒に入りますから。そんなことをして、宝塚の少女歌劇とは仲良くしていたんです。

宝塚の歌劇校の生徒は、かなり石橋辺りにも下宿しておりましたので、浪高の年々の記念祭にやって来て、くじ引きをしたり、待兼山宝探しにグリーンの袴で来てくれたんです。だから浪高の何十周年というときには、著名なスターたちが来てくれました。

彼女たちには、われわれと一緒に写真撮影をすると放校になるという規則がありました。それでも私らは、宝塚少女歌劇の裏にある温泉の大橋のところで、少女歌劇の連中と一緒に写真を撮り、卒業アルバムにその写真を入れて持っているんですね。だから浪高というのは、外部から見ても、内部的に見ても、蛮カラと言われてる、いわゆる一高や三高や大高みたいな官立の高校とは、ちょっと違った雰囲気だったと思います。

阪大医学部でそうそうたるメンバーになった連中は、みんな浪高の理乙の出身ですが、特に大阪府内の尋常小学校でトップクラスの人ばかりが入っているんです。そして、みんな家も裕福だった。私なんかは寺ですから何もありませんけれども、みんな土地を持っていたり、たくさんの借家を持っていたり、かなりの資産があったと思いますし、それは三高とか大高の学生よりもずっと裕福だったのではないかと思うんです。

したがって、昭和前期にはマルキスト、富山高校などでマルクス主義の事件がありました。浪高などはそういうことが全くありませんでした。そういうグループもなかったと思います。それは陰で誰かがやっていたかもしれませんが、表向きにはほとんどなかった。浪高や甲南高校の七年制では、マルキストはほとんど出ていないと思います。それはあの時代一般から言って、ちょっと特徴があると思うんです。

浪高は公立高校で大阪府立でしたから、大阪府内から行く者は授業料の月謝が67円ですが、私は兵庫県で大阪府外ですから84円なんです。日本の教育史では、『文部省年報』ばかりに頼

り、実際に小、中、高、大学の学費がどれだけかを研究したものはないんです。

私の場合では、高校、大学と父が全部付けていて、それが焼けないで残っています。

だから京都大学の西山伸さんにも言ったのですが、授業料がいくらだったとか、仕送りの状況、その他食品などの支出がいくらだったかとかという学生生活の実態も、あまり大学史に出ていないんですよね。私は阪大の『五十年史』をつくるときに、この辺りのことも書いたらよかったと思うのですが、あのときは書いていないと思います。

いろいろ思い出もありますけど、印象に残っているのは、この程度ですね。

菅 浪高は、ほかの官立高校と雰囲気が違うというのはあったんですね。

梅溪 やはり雰囲気はね。浪高の制服というのは、サージの海軍士官服でした。みんな手ぬぐいをつって、高下駄をはいていましたが、弊衣破帽はごく少数で、全体にわりにスマートだったと思う。こういうことを自分で言うのはおかしいですが、そういうような感じでしたね。

さっきの広高の先輩なんか、蛮カラだったと思うんです。

菅 だけど、広高もまだ、官立のなかではおとなしいほうという感じですね。

梅溪 ああ、そうですか。僕は理科へ行きかけたんですけど、色弱があったんですよ。いまは、わりあいに理科でも入れるんですけど、昔はやかましく言って。それでさきにも言いました海軍の文官教授もはねられたんです。海軍の文官教授採用も、戦争の激化によって、海軍省人事局で武官待遇をしなければいけないということになったようで、海軍予備生受験に合格する条件が必要となり、結局色弱があつてはいけないということで、海軍と無縁になったんです。

高校時代は、昭和13年から16年の3月までですが、そのころ文甲の新入生歓迎会で、ずいぶ

ん乱痴気騒ぎをやって、大阪南の島之内警察署へみんな検束され、新聞沙汰になりましたが、生徒主事の教授の出頭で留置されずに釈放されたんです。まだ昭和14、5年ごろは、大目に見てくれていたんでしょうね。

京都帝国大学へ進学

阿部 このあとのお話との関連で必要でしたら、京都帝国大学ご在学中や戦争のご経験等についてもお話しいただけますか。

梅溪 そうですか。では、少し簡単にね。

昭和16年の3月に浪高を出て、これも先ほどから繰り返して申していますように、近いところで、京大の文学部へ入ったんですね。おおむねの大学の文学部などは、願書だけ出しておけばフリーパスなんです。入学試験があったのは、東大の文学部ぐらいだったでしょう。

ただ、私の場合、文学部の国史（戦前は日本史とは言わなかった）を選んだのは、寺であるということも少しはあったのですが、寺を継ぐことは余り考えず、私の母が京都丹波の田舎の出ですが、京都府立第一高女を卒業して大阪の女学校の教師をしていたことから、自分も大学を出て教師にでもなろうかというぐらいの気持ちからだったんです。

私の父は僧侶だったものですから、浄土宗の学校である大阪の教校（元の上宮中学、現在の上宮高校）を出て、東京の宗教大学（現在の大正大学）に明治41年（1908）に入学、大正2年（1913）に卒業しました。そして、英語が好きであったものですから、各宗派が当時海外布教に力を入れていた関係上、ハワイの開教区へ行きたかったんです。

しかし父は、檀家からお金を出してもらって、そういう学校を出してもらっているんで、いまの住職が亡くなるとか何かがあれば、必ず帰ってきて住職になるという誓約書が入っているためにハワイへ行けませんでした。僕が浪高を受けるときには、そんなのがあるとは知りま

せんでしたけれども。ですから、父はハワイに行きたかったけれども、先の住職が死んで、どうしても寺を継がなければならぬので、やむを得ず、帰郷して後継住職となり、一僧侶としての生涯を全うしました。今年が33回忌なんですね。

僕の個人的なことです。よく寺では、こどもが小さいころから衣を着せて檀家回りをさせたりしているところが多いですが、父はそういうことを私にさせませんでした。そして、とにかく簡単に言えば、自分の好きな道を選んだらよいと。これはあとの話ですが、そういうふうにさせたいと思っていたらしいです。

あからさまに言うと、銀行の預金が定期でいくらあれば大学まで卒業できるかというようなことを、父は、寺の営繕講などのために、銀行の人が集金に来たときによく聞いていたとのこと。父の死後わかったことなんです。父は私が高等学校に入ってから大学を出る間の入り用を、克明に書いているんですね。ちょっと変わっていたと思うのですが。それで私は初めから寺を継ぐという拘束を受けていなかったんです。この点、父に感謝しています。

それから、私は京大を受けるときに、なぜ日本のことをやろうとしたかということ、外国史までやろうとしても、なかなか外国まで行けないだろうと。日本なら実地に調査できるからと思ったんです。そしてもし教師になれないときは、近畿日本ツーリストみたいのところへ入って、国内各地や満・韓旅行の案内に行くことができるというようなことを考えて国史をやろうと。そういう非常に俗っぽいことを考えて国史へ行っただけなんです。

京大の史学科というのは、宗門や社家関係の方が多かったところでした。国史の西田直二郎先生が私の主任教授でしたが、この方も浄土宗の寺の出身ですし、東洋史の佐伯富先生、西洋史の原随円・井上智勇両先生もそうでした。だから京大の史学科というところは、べつに就職は考

えなくてもいいというような学生も幾人もいたんです。

ところが私が入った昭和16年というのは、国史の専攻生が16人になったんです。それまで10人を越えたことはなくて、たいていは5、6人だったんです。僕と、いま古代史で活躍している直木孝次郎氏、樋口隆康氏などは、最初から京大の史学科を志望したんだと思います。1回生のときには専攻が決まりませんので。

直木氏は僕より2年先輩ですが、一高から京大へ入った秀才で、また考古学の樋口氏も、同じく一高出で、これら2人と京大の同窓生であることは、僕には有り難く嬉しいことです。

3月の初めに入学発表を見に行くと、翌年の2回生で国史専攻になったのは僕と直木氏と2人だけであったのですが、ふたを開けてみると16人になっていた。みんな、どこかを受けて回ってきたんですね。国内情勢も影響して、国史の志望が非常に多くなったのが昭和16年という年です。

僕は西田先生には、ずいぶんいろいろとご指導をいただきました。とにかく先生は大学の講義がほとんどなく、文部省がつくった国民精神文化研究所の有力な所員として、しばしば東京に行っておられたので、僕はよく重いかばん持ちをしていました。洋書をいっぱい詰めておられるので京都駅まで送りに行き、「先生、これはお読みになりますか」と言うと、「全部は読まないけど持っていかないと」と言われて、たいていドイツ精神史に関する原書が入っていましたね。そんな時代でした。

ですから、講義というのは少なかったですね。僕も下宿は京都に置いていましたけれども、僕の下宿は名ばかりで、尼崎までよく帰っているものだから、下宿のおばあさんには「今日も梅溪さんはお国へお帰りですか」なんて言われて、大学に近い吉田二本松町にいたんです。

いざというときに動員される組織が、当時、

報国隊組織が学部ごとに編成され、また居住地区ごとにつくられていました。その資料は全部、京大文書館の西山氏に渡しましたけれども。

そのように戦時中ですから、2年半というのは、ほとんど勉強をしていないと言ってもいいですね。わりあい真面目に講義は聴きましたけれども、特に国史の西田先生の講義は休講が多く、ノートも数十ページしかありません。しかし、東洋史的那波利貞・宮崎市定両先生の大版の講義ノート各2冊はいまも大切にしています。

そういうことで大学生活というのは、ただ大学に席があったという程度でした。むしろ、あとで少し申しあげたいと思いますが、僕は兵隊から帰ってきて、東京へ出て、個人的に憲法学の藤田嗣雄先生などにいろいろ接触して、そのご指導の下で勉強したと思うんですね。「お雇い外国人」もそうなんですけどね。だから、僕はほとんど戦時中の大学生活では、ろくに勉強しなかったんですが。どうした訳か国史の首席であったために、まわりもちらしく卒業生代表の答辞を読まされることになり、その作文にあたり中学時代の恩師である国語の森仁郎先生や落合太郎文学部長先生にも助けていただいた思い出があります。

そういうことで、戦時中はみんな、誰も身についた勉強はしていないんです。ですから、むしろ大学を終えてから、僕の場合は兵隊から帰ってきてから、いろいろな国史以外の方と接触したことが、現在、僕が興味を持ってやっていることの指導教官だったというような感じですね。もっともその糸口をつくっていただいた方は、大学のときの恩師ですが。

京大のときのことは、『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書』にありますから。僕も直木氏も話をしています。京大のことは、これぐらいにさせていただきます。

京大人文研に就職

梅溪 では、「お雇い」ですか。

阿部 よろしくお願ひします。

梅溪 京大人文研（京都大学人文科学研究所）に入ったいきさつは、昭和23年12月にシベリアから復員をしまして、昭和24年の1月から、教員適格審査を受けてから大阪の大手前高校の講師になったんです。

それは僕がさきに申しました尼崎中学のときのクラス担任で、大変お世話になった国語の森先生という方が、戦後、大阪府庁の調査統計課長をされていたのがきっかけです。森先生は後に夕陽丘や山本の高等学校長をなさった方です。

その方に、とにかく「帰ってきました」とあいさつに行ったら、僕を見て栄養失調気味と思われたのか何か知りませんが、「君、遊んでいないで何か仕事をしたほうがいいんじゃない」と言われたんです。そのときに、ちょうど大手前高校の西洋史の某先生が、大阪の南のほうの新制高校に移られるので、ポストが空くから行かないかと。では、お世話になりますということで、大手前高校の非常勤の講師に行きました。

大手前高校長は、東大英文出の佐藤一男先生。大手前高校は、戦前は大手前女学校ですから女子ばかりだったのですが、戦後、北野中学と交流して男女共学となっていました。

僕はそういう時期に行きまして、着任のあいさつはしましたけれども、佐藤校長が「梅溪さん、3学期のことだから、もうあなたに授業してもらうこともないから、職員会議にだけ出て下さい」と言われた。そして、「あなたはシベリアでペチカたきが上手だったと思うから、職員室のストーブをたいてもらったらいいから」ということで、ほとんど授業はしていませんでした。

すると3月の終わりに、「あなたはもういないから、どこかに代わってほしい」と言われ

て、「そんなのは困りますから、なんとかお世話をして下さいませんか」と言うと、その佐藤校長が親しかった大阪府立池田高校長の後藤安久さんに話をしたから、あなたは昭和24年4月から池田高校の教諭になりなさいとのこと。後藤先生は東大の東洋史です。

それで池田高校に赴任したのですが、1年半ぐらいしかいませんでした。しかし、かけだしの社会科教師として日本史のほか世界史、人文地理、一般社会などの授業を通して多くの生徒を知り、PTAの会合で学校と社会との関係についていろいろの問題に気づいたことは貴重な経験で、大学の教官のみでは得られないものがあったと思います。ですから、昭和24年4月に大手前から池田高校へ移り、1ヵ年と少しいて、やがて昭和25年5月に京大の人文科学研究所に移りました。

このころ人文研は、東方・西洋・日本の3部あり、まだ当時公募制をひいておりませんでしたので、西田教授とか、京大の史学科の先生方がどういう推薦をして下さったか知りませんが、日本部の先生方の面接試問があって、日本部の助手に採用されました。昭和25年ごろの京大人文研というのは、北白川にある旧東方文化研究所を京大が戦後附置研究所とし、東一条に西洋・日本部を増設したものです。北白川の建物は、1900年の北清事変の賠償金で建てたため、いろいろともんちゃくが起こり、学園紛争のころは襲撃的になりました。

旧東方文化研究所というのは、東京の東洋文化研究所に対する西のいわゆる東洋学、中国研究のメッカでした。例えば貝塚茂樹さんとか、安部健夫さんとか、また戦後満鉄から引き揚げられた農業史の天野元之助さんや社会学者の清水盛光さんがおられました。また、今西錦司さんもポストがなくて講師でおられたんですね。僕らは、今西さんが「調査部をつくるんだ。梅棹忠夫くんを呼んでくる」と言われるので期待していたんです。しかし、調査部はでき

ませんでした。しかし、僕らは今西錦司さんの調査について行って多くの思い出があります。

とにかく人文研というのは、普通の学部と違って、いろいろな専門家の寄り合い所帯でして、桑原武夫さんのようなフランス文学者はあるし、河野健二さんのような西洋史の人はいるし、あとから神戸大学の会田雄次さんが来たり、そのほか農業経済の専門の柏祐賢さんとか、先ほどふれました、満鉄調査部に30年、中国の南から北まで歩いたという農業史の天野元之助さんとか。

そういう人たちのところでもまれたのが、僕には大変よかったと思うんですね。人文研のときには寄り合い所帯でしたけれども、東方部はさておき、西洋部の部長は桑原武夫、日本部の部長は社会学の重松俊明、そのあとは坂田吉雄さん。坂田吉雄さんは、三木清さんと京大の哲学で一緒です。人文研では、3部が共に共同研究をして競争していました。

また、論文合評会というのがあって、例えば、日本部の助手が論文を書くと、東方部や西洋部の教授が書評する仕組みなんです。桑原武夫さんは僕の論文を読んで、「こんな不勉強な論文を書いたやつは初めてだ」とみそかすに言って、こけおろす。そうしたら、東方部には僕の浪高の先輩の中国哲学の平岡武夫さんが助け舟を出してくれたりしました。

また一方では、日本部の助手に東方部の重鎮である著名な所員が研究紀要に載せたもの、例えば岩村忍さんのモンゴル史の論文とか、安部健夫さんの「満州八旗ニルの研究」という論文など、われわれ日本部の助手では読めそうにないものを輪番に書評させるんですね。要するに助手をしごく会なんです。

それで大変鍛えられたんですが、安部先生は、「君ね、東方部の助手が10年かかって僕らの論文は読めないんだから、君に読めそうなおことはないから、あれは構わないよ」というようなことを、あとで言って下さった。そういうか

わったことをやっていたんです。

そういうことで、僕は公募制がないときに入れてもらいまして、数年してから公募制に変わったと思いますが、その第1号はたしか西洋部へ入った加藤秀俊氏だったと思います。

それから忘れられないのは、僕ら日本部の助手3人のために、部長の坂田吉雄さんは、「君らはドイツ語が全然読めない」と言われて、マルクスの『ダスキュピタル』やウエーバーの『ヴィツセンシャフトレレ』の原書を読む会をつくって下さったことです。助手時代にドイツ語の勉強をさせてもらって、それはありがたかった。

僕は高校の文甲出身だから、ドイツ語が得手ではないんです。とにかく人文研で坂田先生のおかげで助手時代にドイツ語の勉強をさせてもらって、それはありがたかった。

これはちょっと余談になりますが、阪大の史学科の大学院の入試のときに口頭試問をする時、『資本論』を読んでいるというような学生がいるんです。僕がまだ助教授時代ですが、西洋史の村田数之亮先生は、『資本論』の原書といくつかのドイツ語の字引とを置いておいて、「では君、この字引を使っていいから、ちょっと『資本論』のここだけ読んでみなさい」というようなことを言われるんです。そういうことを昔はやったんですよ。そういう意味で、いまでも人文研の助手の時代は大変懐かしいと思っていますし、そういう点でよかったと思うんです。

「お雇い外国人」研究について

梅溪 それでお雇い外国人をやるようになったことですが、人文研では日本部でも西洋部でもみんな、僕ら助手は所員と言わなかったんです。いまはみんな所員と言っていますけど。当時は教授か助教授が所員であって、助手は教授・助教授の手伝い人（ヘルパー）でした。しかし、所員がみんな文科系の学者で、毎日人文

研に出勤せず自宅で勉強する人もいるものだから、いくつかの共同研究会をつくり、所員が出勤、共同して研究をやろうということになり、僕が入る前からすでに始まっていたんです。

例えば桑原武夫さんのところは、『フランス百科全書』の研究をみんな手分けしてやるのか。もちろん東方部では前からそういうことをやっていて、例えば岩村教授主宰の『元典章』研究班とかがあり、平岡武夫さんの唐代の文献班とかがあり、日本部では明治維新研究班や日本の近代化研究班があった。

僕らがいたときは、ハーバート・ノーマンの『日本における近代国家の成立』とか遠山茂樹さんの『明治維新』とかを取り上げて、それを講読の対象とし、同時に日本の近代化というときに、政治経済、思想文化、その他いろいろ各文化諸部門がありますから、それをそれぞれのメンバーに担当させて研究発表する方式をとっていました。

それには軍事部門もあったんです。戦後は、とにかく日本の軍国主義とか日本の軍隊が敗戦の元凶だというようなことでした。僕は関東軍第五軍司令部直轄の臨時自動車中隊の一小隊長として対ソ戦を戦い、敗戦の実態、軍の崩壊過程をつぶさに体験し、かつシベリア抑留中にソ連軍隊の実態にふれたところから、僕は日本の近代化のなかで軍事部門を担当すると申し出て、幕末の兵制改革から、明治初年の日本の陸海軍の成立過程をやることになったんです。

そして調べていくと、幕末から明治にかけて、たくさんの外国人が軍事顧問団員として来ているんですね。これは外国人も調べなければいけないなど。日本の陸軍はフランスからドイツに替わりますし、海軍は初めからイギリスですけれども、かなりの人数が来ています。それに関連して、政治から経済、あらゆる部門に外国人が来ているんですね。それがお雇い外国人にはまり込んだきっかけなんです。

1947年に、岡山にミシガン大学の日本研究所

の支部ができていたんですね。僕ら坂田先生の研究班、日本近代化班は、このミシガン大学日本文化研究所の岡山支部とコネクションができました。

この支部の初代所長は、ロバート・ホールというミシガン大の地理学の教授、2代目はミシガンからのちエール大の日本史教授のジョン・ホール先生だったと思います。3代目はバークスという、プリンストンの少し南のラトガース大学の法学部の政治学の教授が所長でした。このバークス氏が、僕がお雇い外国人を調べているのを知って、W・E・グリフィスという、アメリカから来たお雇い外国人第1号の資料は全部、僕のいるラトガースにあるから、一度、機会があったら見に来ないかと言ってくれたんです。これが、後に阪大へ移ってから実現したんです。

こうして、次第にアメリカの日本研究を知るにおよんで、僕はいままで日本の大学は、外を知らない時代遅れの研究をしていたのではないかと思うようになったんです。アメリカの日本史研究者はみんなライシャワー門下が多かったのですが、日本文化研究に対するアメリカの考え方は、ライシャワーも言っていますように、日本文化の形成というのは、まず東洋からだ。だから少なくとも、インドと中国の文明の勉強をしなければ、日本文化は勉強できないという考えなんですね。

プリンストンのジャンセン氏でも孫文をやってから坂本龍馬を書いています。向こうの卒業論文は、日本ではやった歴研のような難しいことを言わないで、まず人物研究をやらせるのです。人物研究をやらせれば失敗がなく、論文が書きやすい。だから、ジャンセン氏も自分が孫文をやったのは、ライシャワー先生がそう言ってくれたからだと言っていました。エールやハーバードなんかは、みんなそういう仕方やってきたらしいです。

また、われわれ日本の近代研究をやっている

者は、たいてい中国語も韓国語も話すことができない。中国語も韓国語も話さないで、よく日本史研究をやっているなどアメリカで言われたものですが、これはもっともだと思う。さらに、京大の人文研でやった中国研究というのは、東洋史の場合はほとんどみんな古代なんです。だから、全く現代中国の研究がなかったわけではありませんが、十分ではなかったということです。僕は、これは大きな錯覚だったと思います。

ハーバードなんかは、東亜諸民族語の研究所を置いていて、一人の学生のためにでも、例えばウイグル語のようなデッドランゲージでも研究できるようです。

明治百年のときに、僕が学部長をしていたときに、そういうことを文部省に言ったんですが、文部省は取り合ってくれませんでした。だから戦前の日本では満鉄調査部を除けば、アジア研究なんて全然できていなかったと思うんですね。アジア研究をしていたのは、むしろ戦前では山口経専（山口経済専門学校）、それから大阪商科大学ぐらいではないかと思っています。旧東方研でも、現代中国はわからなかったんでしょう。それから京大の地理学で僕らがお世話になりました主任教授が「陸軍からマレー作戦の作戦地図をつくってくれと頼まれたんだけど、何も資料がないんだ。昔の探検書でようやく地図を描いたんだ。だから兵隊も困っているだろう。」と言われたような記憶がある。

こういう状態で、私の知る限りにおいて、日本はほとんど近代中国や東南アジアというものを十分に調査も研究もしていなかったと思うんですね。

話がよそにそれて恐縮ですが、現在、私たち日本史をやっている者のなかでも、ロシア語文献が読めるものは、ごくわずかしかないんです。北大の北方文化研は知っていますけれども。しかし、そんなことでは日本の外交はできないし、誤訳が起こるのもっともだと私は思

います。こんな状況は戦後も、変わっていないですよ。

国立大学にロシア語を置くとき、阪大の場合は藤本和貴夫氏が就任されたわけで、西洋史でも一時、置きましたけれども。朝鮮語は専任の教官を置くときに、いろいろと人事でもめまして、九大は朝鮮語の外国人教師を任用しましたがけれども、阪大は雇えなかったと記憶しています。

こういうことから、現在の日本の状態は、戦後60年たっても何も変わっていないように思うんですが。これはなんとか早く、今度の学長（総長は戦前の帝大時代からの慣用）にも踏ん張ってもらって、阿部先生なんかは現役ですから、どうか、いまの世界情勢に合うようなシステムをとっていただきたいと思います。

アメリカで、例えばフランス文学を研究している教室にいけば、たいていみんなフランス語で話していますよね。阪大でもイギリス、ドイツやフランス文学の研究室ではそれぞれの外国語で話すようになってほしいですね。

ですから、僕がアメリカから帰国後、学部長時代に、文学部では、外国人教師をもっとたくさん入れたらと考え、講座数が50あれば、少なくとも男女合わせて10人ぐらいは入れたらどうかと本省に掛け合っても、外国人教師の任用は全く難しかった。

話を戻しますけれども、パークス氏が「一度、アメリカに来たら」と言うより前に、ミシガンからエールへ移られたジョン・ホール先生から招かれたんですが、実はお断りしたんです。それは、ジョン・ホール先生は岡山時代に、すでに正倉院文書の紙背文書を日本の古代史で使うんだとあって、日本の国史でもやっていないことをやり始めたんですね。いまのゼロックスはありませんから、フォトスタットという大きな機械で写しました。

ですから、僕はホール先生のもとへ招かれたら、この紙背文書を読まされるだろうと。僕は

古代史をやっていないから正倉院の文書はかなわない。それで僕はジョン・ホール先生に、事情があって身体の調子も悪いし、大学も忙しくて行けないからと断りました。

それから5年がたって、今度はミシガン大学のハケット氏が軍事史をやっていて、山県有朋の伝記を書いているので、その原稿を見てくれということで。彼は神戸生まれで、いまの西宮の神戸女学院大学の建物を建てた人の息子です。カナディアンスクールから大学はハーバードへ帰ったのですが。

彼は僕と1年違いで、「日本研究所で日本語で講義もしてくれ」と言うので、行くことにしました。彼の好意的配慮で、プリンストンのジャンセン氏のところや、パークス氏のところへ行ったんです。そしてパークスさんのところでグリフィス文書というのを見て、グリフィスがyatoi（「雇い」）という言葉を使ってかつて日本の雇いの経験のある者にアンケートを配って調査研究をしっかりとやっているのに大いに触発され、これは僕もやろうと決心したんです。

しかし、雇いは各方面にわたりまして、僕一人では、医学とか音楽とかがわからない。これはなんとかしなければと言っていたら、鹿島出版会の鹿島卯女さんがお雇いのシリーズをつくりましようと言うので、各部門の専門家に集まってもらい、あのシリーズをつくったんです。

いま、僕の手元にはカードで3,000人分ぐらいあるんですけど、これをどうしようかと思っています。一人ひとりの日本における経歴はわかりますが、日本に来るまでの経歴、帰ってからの経歴がなかなかわからないんです。日本の公文書では、お雇い外国人はすべてカタカナでありフルネームが残りませんから、フルネームを探すためには外交史料館を利用する必要があります。その点東京にいると便利です。だいたい昭和20年ぐらいまでは終わっているのですが。

ただ、個人個人の経歴ですから、『Who's Who』みたいな、人名辞典をつくれればいいわけですから、総括的なことは、僕が前に書いた解説で、だいたい足りていると思います。しかし、視角はいろいろあり、もっと深く研究してもらったらいいと思っています。

お雇い外国人のほうは、そういうきっかけでやり始めたということです。

大阪大学文学部に赴任

阿部 次に阪大の文学部のお話をよろしくお願ひします。

梅溪 昭和28年の3月に赴任したと思うんですね。だから私は人文研に、そんなに長くはいなかったんです。

菅 そうですね。昭和28年3月1日付けで阪大に赴任されています。

梅溪 1日付けなんです。これも、いまの教授会がどうしているか知りませんが、旧制の発令をするために3月1日にしているんですね。新制大学になるというんだから、旧制で採用しておこうということ。

このとき僕は、号俸からいうと10級4号で、月給が1万9,200円です。僕のことだから、まだ月給袋を置いている(笑)。僕の阪大での辞令の原物は全部置いてありますから、歴代の文部大臣とか学長その他学内委員会の名も、それでわかる。いずれ文書館に入れます。

法文学部は昭和23年にできて、僕は昭和28年からしか知らないのですが、昭和23年にできたときには、哲学科と史学科と文学科しかなかったわけです。哲学科は、哲学の第一講座と支那哲学(中国哲学)、心理の1講座、社会学の1講座。それから史学科は国史。文学科は国文と英文だけしかありませんでした。

昭和24年ごろからは、史学科でも東洋史や西洋史とか、ほかの学科でもそれぞれ、昭和23年から26年ぐらいに、だんだん1, 2講座ずつぐらい増えていったと思います。

そして私が昭和28年3月にまいりましたときには、歴史のほうは国史と東洋史と西洋史が、だいたい1講座で、そろっていました。国史は助教授がいなくて助手の方がおられたんですが、その人は事情があって関西大学のほうへ移られましたので、その最初の講座の教授であり、僕の主任先生であった藤直幹教授が人文研助手から僕を採って下さったんです。

このとき僕は助教授で入りましたが、助教授は教授会には出席できません。教授会は6, 7人ぐらいの教授だけで運営されていたんです。僕はそのときの教授会の模様はもちろん知りません。もちろん教授会議事録を見ればわかります。学部長時代に過去の一応目を通しましたが。

さて、教育学科が昭和27年に独立します。これは、ちょっとお尋ねのところにもあったような気がするのですが。

阿部 菅さんのご質問ですね。

菅 そうですね。あとでお願いします。

梅溪 だから阪大に赴任した経緯というのは、講座充実のために、そのときの国史の主任教授である藤教授が、たまたま覚えていて下さっていたからと。私が京大に通っているとき、藤教授は西田教授の下で助教授でしたから、私も習っていました。その助教授だった先生が、阪大に文学部ができるというので教授になって来られていて、そこで助教授を探しておられ、たまたま僕を助教授候補とされ、教授会をパスしたというのが経緯なんですね。

菅 では、それぞれの講座の責任の先生方が助教授の先生を選んでというので、国史以外の教室でも、そういった感じなんでしょうか。

梅溪 ええ、たいていはそうだと思います。

藤教授は、停年の半年ほど前に癌でなくなって学部葬をやったんです。その学部葬の弔辞からその他を整理し、また、特に藤教授から、今村総長が文学部の創立について、東大の文学部長をしておられた桑田芳蔵先生に出された手紙

の原物を預かっていたので、僕は退官するときに、これらを全部整理し、残置したんです。しかし、いまの文学部ではわからないと言う。僕は紛争後の昭和59年に辞めているから、その荷物がどこにいつているのかわからないんだけど、なんとか探し出してほしいんです。

その原物の手紙は、『五十年史』の写真に入れておいたもので、内容はわかるからいいんだけど、やはり原物が行方不明では残念な気がします。

内容は要するに、そのときには講座編成などの今村先生の案を、桑田芳蔵さんへの手紙に書いていらっしやるわけですね。

そして法学部は、京大の瀧川幸辰先生が創設委員だったと思います。そのため京大系が多かった。

ほかの経済などは、僕はちょっとわからないけど。経済史の宮本又次先生は、九大から阪大へ来られましたが、京大出ですね。

阿部 経済の創設では高田保馬先生が中心とされましたから、京大系の方が多かったのですが、もう1つの流れとして安井琢磨先生を中心とする東大系の方々がありました。ただ、どちらかという京大系の先生方が多かったようですが。

梅溪 京大のほうが多かったでしょう。

阿部 高田先生の関係で京大系が1つの柱になるのですが、高田先生は九大の先生をされていた時期もおありでしたから、そのご縁で九大からも数名の先生方が来られたとうかがっています。

梅溪 その関係ですね。高田保馬先生と理学部の関集三先生とは姻戚のご関係ですね。僕は関さんとお話ししていたらそういうことで。僕は京大生のとき、文学部のくせに、有名な高田保馬教授の講義を一度でいいから拝聴しようと、2、3人で法経1番教室へ遅れて入場し、高田さんから叱られたことがあったんです。にもかかわらず阪大へ赴任してから、そのことを白状

したら、「そんなこと、ありましたかね。」と聞き流されて、僕の所望した日本の徴兵制に関する英文のご著書を快く貸していただきました思い出があります。

よその学部のことは放っておいて、そのとき文学部の創設には、東大の桑田芳蔵先生と今村総長との間で話が通じていたのだらうということが、この手紙でわかります。今村さんも、こういうことで文学部を発足させたいと。国史学は1講座とか、中国文学とか哲学とか、手紙のなかにいろいろ書いておられます。

そして桑田さんが初代の文学部長。だから僕が就任したときには、桑田学部長から助教授の辞令をもらいました。その桑田芳蔵さんの弟さんの桑田六郎さんが、戦後、台北帝大がなくなりましたから、文学部の東洋史の主任教授で来ておられます。

そういうふうなことで、文学部が発射しているようですね。そして逐次、それぞれみんな講座増を申請していたと思うんです。

阪大に教育学部がないのはなぜ

梅溪 ところで、阪大に教育学部ができなかった問題については、寺崎昌男氏に、今日、このことがあるから聞こうと思っていたんですが。国立大学に教育学部をつくったのは、昭和24年ですよ。

菅 はい、昭和24年の5月です。

梅溪 そうでしょう。僕もよくわからないんですが、うちは教育学科で教育学部をつくりませんでしたね。それをつくらなかった理由はどうか、どういう状況があったんだろうかと思うのですが。このとき、文学部のなかでの教育学の第一講座、第二講座、第四、第五と、そういうふうな増設の進行から言えば、十分、教育学部ができてよかったのではないかと素人考えで思うんです。

ほかの九大や京大など教育学部ができたところは、それよりどのぐらい前に教育学の講座を

持っていたところが学部になっているのか。何講座で学部をつくっているのか。そのへんが僕はわからないので。

菅 旧制時代では、東大だけが5講座で、ほかの大学は1講座だけです。北大はゼロというか、心理学と一緒にいる講座が1つあっただけです。

梅溪 なるほど。そういう点からいえば、阪大の場合には。

菅 阪大にはあってもいいと。

梅溪 あってもいい。数は多いわけよね。

菅 はい。

梅溪 僕はそのへんがわからないので、寺崎氏に「そのへんはどうだ」と聞こうと思いつきながら電話をしていますが、寺崎氏も当時の阪大の内情はご存じないのではと思いますがね。

そのへんのことかわからない。『五十年史』をつくるときに、僕の頭にはあったんですが、そこまで僕は書けなかったし、またわからなかったし。教育学の森昭さんが知っていたかどうかはわかりませんが、もう亡くなりました。しかし、森昭さんも関西学院大学から来て、まだ助教授だったんですから、そのへんは知らないと思う。初期の教授ではないから。田花為雄教授とか、天野利武教授とか、初期の教育学科の主任の教授先生を私は存じあげていますが、当時の文学部教授会では創立当初からの哲学の沢瀉久敬、社会学の蔵内数太、史学の藤、国文の小島吉雄の諸先生が論客で、いずれも学部長経験者で実力あり、特にもし教育学部が論題になったとすれば、人間科学部のときのことから推して、沢瀉先生が批判的というか、反対ではなかったかと推察できます。戦前の日本で教育学は哲学の範疇にあり、アメリカの教育学は異質のものと受け取られて、拒否反応があったともいえるかもしれないとも思われる。

教育学部は1講座しかないところでもできたんですか。

菅 はい、そうです。私は明日、国会図書館に

調べに行こうと思っているんですけども、昭和23年にGHQが国立大学の総長会議をやったときに、そのときに教育学部をつくれと言ってきたようです。

梅溪 医学部長・教養部長もされ、解剖学の黒津敏行教授の日記があり、黒津さんが昭和24年2月13日から19日に至る1週間にわたるGHQ主催の学校長講習会（大学行政官協議会）に今村総長の代理で上京、出席されています。また同日記には阪大に始めて歯学部ができる経緯も記されていますが、これも何かGHQの差し金があったような気がします。どうでしょうかね。

教育学部には、教員養成と教育学の研究との両方があるでしょう。戦前からの哲学者には教員養成はすでに他にあるではないかと思われたのかもしれない。戦前と戦後で全く変質したのが教育学ではなかったか。そのへんのいきさつとして、アメリカ側にどういう考えがあったのか、また日本側の受け止め方を知りたいんです。また、わかったら教えて下さい。

菅 どうやら総長会議のときに、今村総長はアメリカに対して、阪大では何も具体化していない、何も検討していないというふうな答えをしたらしいです。

梅溪 それは何かありますか。

菅 それはトレーナー文書と言って、アメリカのほうの文書が。

梅溪 それはおそらく、大阪に文科系学部ができるときには懐徳堂の文庫を阪大に寄贈しようという考えが懐徳堂記念会の方々の間でかねてからあり、同会理事長小倉正恒さん（元住友本社総理事）と今村総長との間で大筋の諒解が付いたんですね。こういう事情があって、たとえ教育学の講座が一、二、四、五とあっても、なによりもまずむしろ文科系（法文）学部というものを確立させたいと今村先生はお考えになったのではないかと思います。それにしても、今村先生に、もっと聞いておけばよかったと残念

に思っています。

それともう1つは、大阪には天王寺師範と池田師範がありましたね。また、池田師範と天王寺師範は派閥争いをして仲が悪いことでも有名でした。いまは大阪教育大学と言っていますが、そういうものが、すぐ近くにあったということは、今村さんがあまり教育学部をつくることに積極的ではなかった、むしろ消極的で回避しようとなさった理由に入るのか、入らないのか。僕は検討問題だと思う。大阪の池田師範と天王寺師範の問題は、『百年史』のときにでも一度考えておいていただきたいと思います。

さらに言えば、文学部における哲学科の一部門として昭和24年5月開設の教育学第一、第二の講座は、必ずしも、できてすぐに専任の担当教授はいませんでした。例えば、国立教育研究所長の村上俊亮先生が翌25年2月第一講座を兼任したし、元京城帝大の田花先生も27年4月から第二講座が専任で第四講座を兼任で、第一、第二とも専任教授はいなかったのが実情でした。

国史学で言いますと、僕の1年あとに時野谷勝教授が第二講座の教授として昭和29年に来られているんですけど、国史には第二講座がないので教育学の第五講座の流用なんです。ほかの学科でも教育の講座を流用してたんです。これは実際的な問題として、哲・史・文の各学科にとっては好都合だった。しかし、教育学の先生方にとってはきわめて不本意であったわけですね。

だから、少しはそういう事情が働いているのではないかと思う。これは総長から言えば、好ましからぬことかもしれませんが、学部の講座充実の手段として、文学部では助手定員をつぶして教授に振り替えをしたりしていたのは、各大学とも同じでしたからね。学部長は、人事の所属表を3通りぐらいつくっていました。講座間の貸し借りもしていますから、本省に示すも

のほかに、うちわの人事表をつくっていたのが現実でした。文学部はほとんどが非実験講座ばかりで、かつ定員がわずかで、しかも定員増がなかなか認められない当時において、やむなくとった結果だったんです。この件は国立九大学文学部長会議の本省への改善要求だったんです。

創立初期の文学部は、大変薄暗い昔の浪高の尋常科の理科の建物で、僕は桑田芳蔵学部長から辞令をもらいました。教室は惨憺たるもので、暖房はありませんから、冬はみんな鉄の火鉢を用い、十能を持って火種を小使室にもらいに行つて、火を起こして暖をとり、火の元用心をしなければならなかった。本もなく、主任教授の藤先生が家から持ってきて、「ちょうど家の置き場所がないのでいいわ」とおっしゃっていたけれども、それを並べて、書架を3、4本置いていたのが実情です。それは僕が赴任した昭和28年。昭和23年から5年たつてもそうでした。

そして、ようやく教室としてロ号館というのができて、少しはまともな研究室に入ることができたんです。

阿部 いまロ号館は一部だけしか残っていませんね。

梅溪 残っていないでしょうね。

そんなことで、惨憺たるものでしたね。お粗末な。戦後最初は、どこの学校でも、みんなそうだったのではないのでしょうか。

だから文学部としては、懐徳堂文庫の取り扱いについて、懐徳堂記念会に対していろいろと条件がありました。藤塚誠二さんという書記を引き取り、その勤務部屋をつくるとかいろいろの条件があったけれども、あまり文学部ではうまくやっていませんでした。藤塚老人に申し訳ないと思っていました。藤塚さんは懐徳堂文庫のお守り役として実によくやって下さいました。息子さんも図書館写真室の主任として尽力していただきました。

また懐徳堂記念会理事長の堀田庄三さんや堂友会の方々が、先賢祭や講演会の運営に十分な配慮と協力をして下さいましたことを、当時阪大側で主に懐徳堂行事を主宰されていた中国哲学の木村英一教授から、「忘れてはならんよ」とよく言われたのを今も思い出します。住友の堀田庄三さんの力で懐徳堂記念会も適塾の現地保存事業も完成したと言ってもよいでしょう。

大学紛争について

阿部 先生が学部長になられる以前には高度経済成長が進み、日本がだんだん豊かになっていって、国立大学の文学部もじりじりということでしょうが、施設などは改善されていったと思います。

先生が学部長に就任される少し前には、大学紛争がございましたね。これについて、お話ししたいのですが。

梅溪 大学紛争なんて言うと、大学紛争で活躍した連中のなかから、のちに学部の教授になって、学界で大いに活躍されているので、そんな昔の話をしたらいけないとも思いますが。

しかし、いまは紛争と言ってもわからないでしょう。昭和43年に東大の安田講堂の封鎖とか、全共闘や各セクトの積極的な活動が起こり、やや遅れて昭和44年に阪大も紛争に入ったわけです。これは忘れられないですね。これも学生の処分問題から始まって、先生もお読み下さった『五十年史』に中馬一郎くんが書いています。

中馬一郎くんという失礼なんですけど、彼と僕は尼崎で小学校が一緒なんです。彼は明治期東大医学部出の阪神間における知名の士であった尼崎の中馬病院の院長の令息で、僕より4年ほど小学校があとなものだから。

その『五十年史』を若槻総長時代につくるとき、僕は歴史だから委員長になれと言われてたけど、文学部は戦後の昭和23年にできた学部でしょう。旧制の学部と一緒になったから旧制づ

らをしているだけで、初めから新制大学みたいなものだから、「そんなのはようやらん」と言って断ったんです。それで50年部局の中馬くんが委員長をやってくれたんです。

その委員長みずから、やっかいな紛争問題を書いてくれた。僕は、よく書いて下さったと思います。ただ僕は、ちょっと話が横道にそれますが、大学の各学部の事務局、特に豊中キャンパスの事務局の古い職員のなかには、まだわずかに経験者がいると思うんですね。僕らよりも、学部の教官よりも、いろいろな事情をよく知っている人がいると思う。

ですから、これは『百年史』のこともありますので、紛争問題に限らず全般にわたって、事務官の方でどなたか適当な方がおられたら是非聞いておいていただきたいのです。

紛争に限って言うと、民学同や民青や全共闘など、各セクトがそれぞれアジビラを学内に配りましたね。各部局で事務の皆さんがあれをずいぶん集めてくれたんですよ。文学部でも、ずいぶん集めたけれど、どう処理したのかなと思うのですが。たぶんもうないでしょう。

僕はスタンフォード大バークレー校で、スカラピーノ教授に会ったのですが、彼は、尼崎の旭硝子とか、各地の工場のアジビラから、日本の各大学のセクトのアジビラまで、ものすごく集めているんですよ。ですから僕はスカラピーノさんに、「誰か学生に日本の学園紛争史を書かせるのですか」と聞くと、「さあ、できたらいいですね」なんて言っていたのですが。

スカラピーノ教授は、ガリ版刷りの筆跡と内容を見ればだいたい各セクトが全部わかると、僕に説明しました。それはたしかにより着眼で、僕は「あなた、やりなさい」と言ったけど、僕はその結果が出ているのかどうか知らないんです。

『五十年史』のときの記憶では、評議会の記録が完全そろいではなかったようでした。特に紛争中は、評議会を本部事務局外の、北浜のレ

ストランや心斎橋の某ホテルなどでやったりして、そのときの議事録は本部でもできていないと思うんです。

釜洞総長が機動隊をいつ導入するかの議題の際に書かれたものなどをメモしたノートを、まだ大阪に置いております。文学部教授会も豊中キャンパス内でやることができませんので、刀根山の薬学部、あるいは吹田キャンパスの微研（微生物病研究所）の会議室をお借りしたり、私の寺の本堂で何回もやりました。この間の議事録を評議員の原亨吉先生がつくろうとご尽力下さいましたが、結局できませんでした。

また、封鎖中の僕の研究室には「住吉高校反戦同盟」のアジビラが貼ってありましたね。封鎖解除の際、こうした内部の状況をすべて撮影したんですが、そのアルバムはいまどうなっているんでしょうか。紛争時の史料は、もう各部署に残っていないでしょう。おそらく。

なお、大学紛争以前、豊中キャンパスは、昭和25年の朝鮮戦争に関連する吹田事件、枚方事件の舞台となっていたのです。これは『五十年史』に書かなかつたけれども。要するに、在日朝鮮人と日本共産党がタイアップして、1952年6月24日の夕方、「伊丹基地粉砕・反戦独立の夕」が大阪府学生自治会連合会によって豊中キャンパスで開催され、多数の参加者があり、集会終了後、デモ隊が吹田操車場へなだれ込んだんです。同時に起こった枚方事件では、今日では当時工学部学生で日本共産党の大阪大学細胞（支部）の中心メンバーだった某氏が関与していたとされています。

なぜ豊中キャンパスが選ばれたかという点、要するに近くに伊丹の飛行場と刀根山の米軍キャンプがあったからと思う。

吹田事件では列車を止めたり、枚方の旧陸軍工廠は、昭和25年に払い下げられて小松製作所ということになっていましたが、そこでは砲弾をつくってましたので、それを攻撃するといふので、2,000人から3,000人が集まったんです。

そういう事件や、昭和44年より少しあとに続く紛争。これは60年安保や70年安保にも関係しますが、その時期の学生運動を『百年史』でどのように取り扱うか、いまから調査研究しておく必要があると考えます。『五十年史』ではふれませんでしたから。

阿部 当時の阪大の学生は、学生運動にどの程度、参加していたんでしょうか。

梅溪 それは学生部がある程度つかんでいたのではないのでしょうか。僕はいろいろ学内委員をやりましたが、一度も学生生活委員をしたことがないんですよ。理学部の名誉教授の中岡稔先生にでもお尋ね下さい。

学生部で、この紛争のときにいろいろ苦勞されたお一人です。熊谷元総長も、学生部のことはご存じでしょうが、ごく初期のことは、中岡先生が詳しいと思います。

阿部 この辺りを公的な年史に書くか書かないかの判断は難しいところなんですけど、重要な事実として認識して、調査しておくことは、どうしても必要だと思います。

梅溪 調査だけはしておいたほうがいいと思う。

菅 いままで出た大学の年史でセクトの動きを書いているのは、九大の『七十五年史』ぐらいですね。

梅溪 そうですか、それは知りませんでした。そこに書いていますか。

菅 そうですね。あそこへ米軍機が落ちたりとか、いろんな事件がありましたので。

梅溪 ああ、米軍機が落ちたから。

これだけ、いま手元にあったのですが、これは僕が釜洞総長のときにできた学内報道委員会の一委員として関係した「大阪大学の動き」という学内速報です。これは全部、大学に保存していると思う。『五十年史』のときの資料として。

菅 『五十年史』の資料のなかにあります。

梅溪 そうそう、『五十年史』の資料があると

思いますから。この原稿は、2, 3人の委員で紛争処理についての大学側の態度を学生諸君に通報するために、毎号急いで書き上げたもので、中岡先生にもずいぶん援助を受けたと思いますので、この辺のことを一度、お尋ねいただけたらいいかと。

なお、紛争時の資料として、昭和44年の「封鎖解除立会之証」、昭和47~55年の間の「大阪大学入構証」や、昭和51年2月26日付けの若槻総長のときの「証明書」などを持っています。最後の証明書は、ちょうど文学部長のときで、若槻総長が2, 3日不在のため発行されたと記憶していますが、文面には、「本証所持者は、大阪大学総長の代理者として、緊急時に警察力導入の権限を与えられていることを証明します」と書いてある。こんな「証明書」を使用することがなかったのは幸いでした。まあ、つまらないものを持っているということだけ覚えておいて下さい(笑)。

とにかく学生運動の動きを書いている九大は別格ですね。

菅 九大の人の話によると、『七十五年史』は大学紛争を書くためにつくったようなものだとされていました。

梅溪 ああ、やはりね。それで『五十年史』をつくったときに、蛋白研(蛋白質研究所)の泉美治さんが、「『大阪大学五十年史』の裏面史か秘史を書こうや」と言われたことがあったんですが、たくさん書き手が出て困ると思い、失礼ながら聞き流しました。

豊中キャンパスが封鎖されたのは、関西大学のYくんが指導に来たともいわれましたが、関西大学史には、紛争のことを何か書いていませんかね。

菅 ちょっと確認していないですね。

梅溪 机を積み上げて封鎖するとか、ああいうのは阪大の学生は知らなかったから、みんな他大学の玄人に習ったんじゃないかな。

豊中キャンパスの封鎖期間中に、各研究室の

図書が学外へ運び出され、古本市場へ売り出され、一応各自被害届を出したが、手元へ戻らなかった。国史の僕の研究室の図書はどこにでもあるものばかりでしたが、東洋史の山田教授などは外国書が多く、研究上大きな支障があった。東京本郷界隈の古書店ではこの種の図書を買わなかったそうだが、関西では古書店の目録に出たものもあった。

だけど紛争でプラスがあったというのは、各学部の教官が互いに一緒になって活動しなければならなくなり、おのずと仲良くなったことですね。平生なら、中岡さんみたいな数学の先生と、僕ら文学部の歴史屋と何も関係がない者が本当に親しくなって、飲み食いを共にして。僕はあまり飲めませんが、飲み助はみんな豊中辺りの飲み屋へ行って、本当に各学部の間の人的交流が非常によくなったことですね。

釜洞総長とは、僕は懐徳堂や適塾を通じて、心安くさせてもらいました。そこで釜洞さんは、総長になるとすぐワーキンググループになってくれと言われてね。しかし、文学部は教授会で釜洞総長反対を決めていたので、「私は血圧が150ほどありますのでお断りします」と言ったら、「わしは220あるんだ」と言われたのをいまも思い出します。個人的には申し訳ない気持ちでした。総長は「大学はあくまで研究と教育の場でなければならない」という信念のもとに、機動隊を入れて一挙に封鎖を解除され、人間科学部や日本学科などの創設、適塾の解体修理・現地保存を実現された。この間の激務のため、退官後2年の昭和52年、66歳で、曲直部くんらが一生懸命お守りしたにかかわらず、結局、持病の高血圧と糖尿病の悪化で亡くなりました。

とにかく釜洞さんには人を魅するものがあった。釜洞さんを先頭に、教官、学生が御堂筋をみんなでデモ行進しましたね。あの写真は『五十年史』に載せましたかな。

釜洞さんは総長として、紛争期でもあったか

らでもありますが、よく各学部を回って、実情や教官の意見を实地見聞された。私はこれを高く評価しているんです。

いまはどうか知りませんが、昔の豊中キャンパスでは、文科系学部はほとんど全部が非実験であるのに対して、基礎工学部と理学部は、たぶん全部が実験講座でしょう。おおよそ冷暖房器具は、文学部は学部長室と事務室に1台か2台しかなかったんです。

ですから僕は昭和53年に学部長になったとき、産学協同で会社などから理科系学部へ来る研究費、産学協同の承認は評議会の前の学部長懇談会でやるんです。それで僕は若槻総長に、「産学協同で金が来たら、せめて10パーセントでも文学部に回してくれたら、承認できますが」と言うと、若槻さんが、「君もえらいこと言うね」と言われたけど。

そんなことは実際できませんけれども、結局、文学部と非常な格差があるんですね。

総長は概算要求のときには、学部長を呼んで総長がヒアリングするけど、総長みずからが各学部の状況をつかむために学部へ来たことがない。歴代総長は、任期中、各学部の教官・学生とできるだけ会見してくださるよう心掛けてほしい。

僕は文学部長になって、お金がないところだから、せめて会計掛長はしっかりしたのを回してくれと申し入れました。そうしたら釜洞総長が回してくれたのかどうか知りませんが、基礎工学部からベテランの会計の人が来てくれた。しかし「文学部に来ましたら1桁数字が違うので困ります。間違えます」と言われて、ああ、

そんなもんかなと。

いまでこそ、国史学も実験講座になっていますけれども、昔は実験講座ではなかった。そこで文学部内の非実験講座が、社会学・心理学・教育学の実験講座の上前をピンハネしていたんですよ。それが人間科学部になって、文学部を離れた要因の1つと思っています。

梅溪昇大阪大学名誉教授略歴

- 1921年 1月 兵庫県に生まれる
- 1938年 3月 尼ヶ崎中学校卒業
- 1941年 3月 大阪府立浪速高等学校卒業
- 1943年 9月 京都帝国大学文学部史学科国史専攻卒業
- 1944年 2月 入隊
- 1948年12月 復員
- 1949年 1月 大阪府立大手前高等学校講師
- 1949年 3月 大阪府立池田高等学校教諭
- 1950年 5月 京都帝国大学大学院退学
京都大学助手人文科学研究所
- 1953年 3月 大阪大学助教授
- 1953年 4月 大阪大学助教授文学部
- 1962年 2月 文学博士（大阪大学）
- 1966年 4月 大阪大学教授文学部
- 1969年 9月 大阪大学評議員（12月まで）
- 1972年 4月 大阪大学評議員（1974年3月まで）
- 1974年 4月 大阪大学文学部長・評議員（1976年3月まで）
- 1984年 4月 大阪大学停年退職
大阪大学名誉教授

Memoir of Osaka University Talked by Emeritus Professor Noboru Umetani (1)

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Emeritus Professor Noboru Umetani related to the history of Osaka University. After Professor Umetani graduated from the Naniwa Senior High School, he studied at the Faculty of Letters in the Kyoto Imperial University. After the Second World War Professor Umetani became assistant professor of the Institute for Research of Humanities in Kyoto University, and started the research on the history of modern Japan. There he energetically conducted research on *oyatoi gaikokujin* (the foreign specialists who were hired by the Meiji government). In 1953 Professor Umetani was invited as associate professor by the Faculty of Letters of Osaka University. Promoted to professor in 1966, he experienced the so-called 'students' riot' at the end of the 1960s.